自然言語処理 74－11
（1989. 9. 21）

物語文章における名詞句の指示対象の数について

桃内佳雄
北海学園大学工学部

物語文章においては，物語に登場する多くの物・事が名詞句によって参照される．物語文章で記述される物語は，時間と空間の中に位置づけられる物語世界の中に展開され，名詞句の指示対象である多くの物・事はその物語世界の中の対象となる．物語世界の中に登場する対象への名詞句による参照の基本的な形は，新しく導入しつつ参照する場合とすでに導入されている対象を照応する場合である．いずれの場合にも，名詞句が具体的にどのような対象を参照しているか，つまり，指示対象がなんであるかを同定する過程は，文章理解における一つの重要な意味情報処理過程である．具体的な日本語の物語文章について，この指示対象の同定という問題に関して，意味情報処理過程という視点から考察を進めてゆくと，いくつかの解決しなければならない具体的な部分問題が出現してくる．そのような部分問題の一つとして指示対象の数の同定に関する問題がある．本報告では，名詞句により物語世界に新しく導入される指示対象の数を同定するための手がかりと物語世界にすでに導入されている複数性を有する指示対象への照応に関する基礎的な考察を行なう．

Studies on the Cardinalities of the Reference Objects of Noun Phrases in Japanese Narratives

MOMOUCHI Yoshio
Faculty of Engineering, Hokkai-Gakuen University

This paper is concerned with heuristics for identifying the cardinalities of the objects to which noun phrases refer in Japanese narratives. Japanese doesn't have morphological devices which distinguish between singular terms and plural terms. We must use some other linguistic cues, contexts and common sence knowledge to identify the cardinalities of the reference objects of noun phrases. We examine many noun phrases in Japanese narratives and present a taxonomy of linguistic and pragmatic cues for identifying the cardinalities of the reference objects of noun phrases. We also consider the interpretation of anaphoric noun phrases which refer to the complex reference objects which were constructed from the objects formerly introduced into the narrative.

1　はじめに

物語文章においては，物語に登場する多くの物・事が名詞句によって参照される．物語文章で記述される物語は，時間と空間の中に位置づけられる物語世界を展開し，名詞句の指示対象である多くの物・事はその物語世界の中の対象となる．物語世界の中に登場する対象への名詞句による参照の基本的な形は，新しく導入しつつ参照する場合とすでに導入されている対象を照応する場合である．いずれの場合にも，名詞句が具体的にどのような対象を参照しているか，つまり，指示対象がなんであるかを同定することは，文章理解にとって一つの重要な意味情報処理過程となる．

名詞句とその指示対象の処理に関しては，これまでにも多くの研究がありなお考察すべき多くの問題があるが，指示対象の個数および物語世界の中での時間的・空間的位置づけに関連する基本的な問題をまとめると次のようになるであろう．

［１］指示対象の特定性に関する問題．

（１）特定の一個，複数個，あるいは不定個の指示対象であることの同定．

（２）総称的な指示対象であることの同定．

［２］物語世界（時間的・空間的場）の中での存在性に関する問題．存在性に関しては次の三つの区別が基本的である．

（１）既定の指示対象：過去から現在にいたる物語世界の中に具体的な物・事として存在する．

（２）未定の指示対象：存在していることが推定されるが，時間的，場所的に未確認で，物語世界の未来において具体化する可能性がある．

（３）想定・仮定の対象：具体化することはない．

本報告では，［１］・（１）に関する次のような基礎的な問題について考察を進める．

＜１＞名詞句により物語世界に新しく導入される指示対象の数を同定するための手がかりとしてどのようなものが考えられるか．

＜２＞物語世界にすでに導入されている対象への名詞句による照応について，複数性を有する指示対象へのどのような照応の形が存在するか．

2　名詞句の指示対象の数

日本語では，英語などとは違って，名詞の数を，名詞の形態上の変化としての単数形，複数形によって区別して表現することはしないが，複数を表わす表現がまったくないというわけではない［1］．人や動物に対して主として用いられる，「がた」，「たち」，「ども」，「等（など，ら）」などの接辞を付加した表現，「諸・・」という表現，また，「山々」，「木々」，「家々」などの畳語形式などによって複数であることを表現することができる．また，数詞と助数詞とから構成される数量詞を用いることによっても名詞の指示対象の数が複数であることを表わすことができる．いま，”名詞の指示対象の数”という表現を用いたが，名詞の数に関する議論は，名詞の表層的な手がかりによる数とその指示対象の数とが必ずしも一致しない場合があるので，一般的には，名詞の数とその指示対象の数とをきちんと区別して行なうべきであろう．日本語では，特に，数を表わす表現が用いられない場合には，指示対象の数は不定ということになり，当然のことながら，名詞句の指示対象の数の同定は，知識や文脈情報の利用のもとに進められなければならない．

それでは次に，名詞句の指示対象の数に関するいくつかの側面について，具体的な文章例［教育出版・改訂小学国語２上・４頁－７頁・「はるのくまたち　神沢利子」］についての検討を通して考えてみることにしよう．

＜文章例１＞

＜1-1＞山(1)に、こぶしの花(2)がさきました。

＜1-2＞くまのかあさん(3)は、ふゆごもりのあな(4)から出たばかり。

＜1-3＞こひきの子ぐま(5)は生まれたばかり。

＜1-4＞木のめ(6)、くさのめ(7)、かあさん(8)はおいしいもの(9)をさがします。

＜1-5＞空(10)があかるくまぶしくて、足のうら(11)がくすぐったくて、子ぐまたち(12)はくふくふわらいます。

＜1-6＞かあさん(13)は木(14)にのぼります。

＜1-7＞なんてじょうずなこと。

<1-8>ほら、もう、あんなにたかいところ(15)。
<1-9>青空(16)にゆれるこぶしの花(17)をたべています。
<1-10>子ぐまたち(18)にも、「さあ、おたべ。」とおとしてやります。
<1-11>子ぐまたち(19)は、もしゃもしゃ、べちゃべちゃ、花(20)をたべます。
<1-12>子ぐまたち(21)の上(22)に、花(23)はゆき(24)のようにおちてきます。
<1-13>たべあきた子ぐまたち(25)は、こんど(26)は、ころころおすもうごっこ(27)。
<1-14>かあさん(28)は、ゆっくり木(29)からおりてきます。
<1-15>子ぐまたち(30)は、もうすぐ大きくなるでしょう。
<1-16>木のぼり(31)をして、ひとり(32)でたべもの(33)をさがすでしょう。
<1-17>おや、空(34)に一つ(35)、たべのこしの花(36)。
<1-18>それ(37)は、白いひるのお月さま(38)です。

指示対象の個数によって名詞句を分類し，数の同定に関わる手がかりについて検討してみよう．

（１）特定の一個の指示対象を持つ名詞句

山(1)（いまデフォルトとして一つの山があると考える．），くまのかあさん(3)（かあさん(8)，(12)，(28)はこの指示対象を照応：具体的な登場物として一個．），ふゆごもりのあな(4)（くまの一家族にとってある年のふゆごもりのあなは一つと考えるのが常識．），空(10)（青空(16)，空(34)はこの指示対象を照応：空が一つであるというわれわれの住んでいる世界の常識を物語世界へも適用．），木(14)（木(29)はこの指示対象を照応：いっぴきのくまのかあさんが一時にのぼることのできる木は一本であると考えるのは常識．），たべのこしの花(36)（”一つ”という数量詞による修飾により一個であることを同定する．比喩表現である．それ(37)はこの指示対象を照応．），白いひるのお月さま(38)（お月さまは一つというわれわれの世界での常識を物語世界へ適用．），あんなにたかいところ(15)（くまのかあさんのいるところ，一つの場所．），おすもうごっこ(27)（”こんど”するおすもうごっこは一つの事象．）子ぐまたちの上(22)，こんど(26)，ひとり(32)，一つ(35)

（２）特定の複数個の指示対象を持つ名詞句

二ひきの子ぐま(5)（”二ひき”という数量詞による修飾により，”子ぐま”の指示対象は複数で，その個数が「２」であることが同定される．以下，<1-5，-10，-11，-12，-13，-15>に現れる　子ぐまたち(12)，(18)，(19)，(21)，(25)，(30)は，”たち”という接辞を付加することにより複数個の対象を照応指示していることを明示している．）足のうら(11)（この指示対象は，”二ひきの子ぐまたち”の指示対象に関連する対象への推論による照応により得られる．そしてそれは複数であり，「子ぐま一匹の足の数は４である」という常識的知識の利用により，その個数は「８」となる．）

（３）不定個の指示対象を持つ名詞句

こぶしの花(2)，こぶしの花(17)，花(20)，花(23)（これらはすべてその個数を文章中の情報からは同定できない不定複数個の指示対象を持つと考えられる．”こぶしの花がさきました”という表現からデフォルト的に考えられることは，”こぶしの花”の指示対象が不定複数個であるということである．また，文脈から，こぶしの花(17)，花(20)，花(23)の指示対象は，こぶしの花(2)の部分集合である．さらに，くまのかあさんがたべるこぶしの花(17)と子ぐまのたべる花(20)のそれぞれの指示対象は相異なる集合を指示対象とするであろう．それらのこぶしの花と花(23)の指示対象との関係はどうであろうか．），ゆき(24)（花(23)に対する比喩表現．）木のめ(6)，くさのめ(7)，おいしいもの(9)（これが表出された時点ではまだ具体的な指示対象を持っていないが，”さがす”ことによって具体化するであろう不定個の未確認の対象を指示すると考える．）木のぼり(31)，たべもの(33)（物語世界において時間の経過とともに具体化してゆくであろう不定

個の未定の対象（行為と物）を指示している．）

このような簡単な物語文章においても，［１］・（１）に含まれるすべての場合の例がいろいろな形で出現し，その同定のためにさまざまな情報が関わることが示された．また，［２］の問題について考えると，大部分は過去から現在において具体的に物語世界に存在する対象であるが，未定・未確認の対象も数は少ないが出現している．指示対象が事象である例も含まれている．

３　指示対象の数を同定するための手がかり

前章における<文章例１>における名詞句の指示対象についての考察では，名詞句の数を同定するための手がかりとして，接辞，数量詞そして常識的知識の利用が示された．また複数個の指示対象への照応として最も基本的である，複数個であることが明確に示されている対象への照応が示された．本章では，名詞句の指示対象の数を同定するための手がかりについて，これまでに出てきた手がかりも含めて，一個の指示対象であることを同定するための手がかりと複数個（二個以上）の指示対象であることを同定するための手がかりへの大分類を基礎として考察を進めよう．

［１］一個の指示対象であることの手がかり

（１）数量詞

一個の指示対象であることの手がかりを与える数量詞は多様である．一個であることを明確にすることが文脈情報や知識の利用だけでは不十分な場合に，一個であることを示す数量詞が用いられることが多い．強調／確認のために用いられることもある．

<1>そのとき、だんちのはずれから、一ぴきの白い子犬がころころかけだしてくるのが見えました。

<2>からだにほそい糸を一本まいて、じっとしていました。

（２）単数詞（単数名詞，代名詞）

”ぼく”，”わたし”，”きみ”，”あなた”などの代名詞は一個の指示対象しか持たない．

<1>「しゅっぱつ。」と、ぼくが大きな声でいいました。

（３）常識的知識

物語世界の中で一個の対象であると同定されるために利用される常識的知識にはどのような知識があるだろうか．その常識的知識は読み手であるわれわれが生きている世界で一個の対象であると認識するために利用される常識的知識がそのまま移されて用いられる場合が多い．①物語世界全体でただ一個存在するもの（空とか登場物），②物語世界の中のある状況の中でただ一個存在するもの（物理的な制約や経験的な知識に基づく）．

<1>空があかるくまぶしくて、足のうらがくすぐったくて、子ぐまたちはくふくふわらいます。

<2>かあさんは木にのぼります。

［２］複数個の指示対象であることの手がかり

これは，大きく，複数個の指示対象が同種であるか異種であるかに分類されるであろう．

［２・１］複数個の同種の対象からなる複指示対象（同種複対象）を指示することへの手がかり

（１）数量詞

数量詞は特定の複数個の指示対象であることの手がかりを与える．

<1>二ひきの子ぐまは生まれたばかり．

<2>ふと見ると，道ばたにじぞうさまが六人立っていました．

数量詞に関する一般的な考察［1, 2, 3, 4］において，数量詞の現れ方には基本的に次の三つのパターンがあることが示されている．

QのN　　二ひきの子ぐま

NQC　（子ぐま二ひきは）

NCQ　　じぞうさまが六人

また，すべてのQ，N，Cについてこの三つのパターンが意味的に同等であるとは限らず，数量詞の位置によって意味が異なってくる場合があるということ，つまり数量詞の移動に関して制限があるということも論じられている．さらに，数量詞が必ずしも対象の個数を表わしているとは限らないということも指摘されている．たとえば，次のような例文について考えてみよう．

＊<3>２０００ＣＣの車を買った．

＊<4>５Ｋｇの子豚を買った．

＊<5>５Ｋｇのリンゴを買った．

<3>とか<4>では，数量詞は指示対象の属性を表わしている．つまり，数量詞にはそれが修飾する名詞の指示対象の個数を意味する場合とその指示対象の属性を意味する場合があるということである．しかし，<5>では，<4>と同じ”５Ｋｇ”という数量詞がリンゴ一個の属性を表わしているとは常識的には考えにくい．全部合わせた重さとして５Ｋｇになる不定の複数個のリンゴの存在が推論される．つまり，この例では，”５Ｋｇ”というのはリンゴ一個の属性ではなくて，複数個のリンゴの属性となっている．また，質量名詞の量を表わす場合も，個数ではない．そのほか数量詞の意味解析においては，定・不定との関わりや全体量と部分量の関係などいくつかの制限を考慮しなければならないことなどが考察されている．

（２）接辞

接辞による複指示対象の指示は，特定の複数個である場合と不定の複数個である場合を含む．

<1>子ぐまたちにも、「さあ、おたべ。」とおとしてやります。

<2>いつも、おいものつるとか、まめかすみたいなものしか食べていなかったので、白いごはんがとてもおいしくておいしくて、わたしは、顔じゅうごはんつぶだらけにして、むちゅうで食べちゃった。

（３）複数詞（複数名詞，代名詞）

<1>ふたりは，しばらくこわいかおをして，にらみ合っていました．

<2>みんなは，むねをおどらせて，山のてっぺんに行きました．

その指示対象は文脈に応じて，特定の複数個として，あるいは不定の複数個として解釈される．

（４）複数性を付与する連体修飾語句

<1>さて、この両方のコップを見つめさせながら、同時に指を入れ、どちらがあたたかく感じるかを、多くの人に言ってもらいました。

<2>竹のかごを、海の中へ投げこんでおくと、あくる朝には、いっぱいの魚が、ぴちぴちとおどりはねていました。

<3>夜のあらしのうみにするために，へやじゅうのカーテンをしめしました．

（５）複数性を付与する連用修飾語句

<1>赤いきのこが、てんてんと生えています

<2>けれども，りこうなジョンは，どくやくの入ったじゃがいもを，長いはなで，口までもっていくのですが，すぐに，ポンポンと，なげかえしてしまうのです．

<3>春が来ると、あっちからもこっちからも、自てん車が走りだします。

<4>その草原のまん中の方に、古い木の切りかぶが、いくつもいすのようにならんでいます。

<5>わたしが子どもだったころ、せんそうがあってね、てきのひこうきが毎日のようにとんできて、ばくだんを落としたの。

（６）複数性を付与する名詞句

<1>みんな，うちへとんでかえりました．

ストローとせっけん水をもってきました．それから，きょうそうのようにして，シャボン玉をふきました．

<2>スキーをはいて学校へ行っていたにいさんやねえさんたちも、自てん車を走らせていくのです。

（７）複数性を付与する動詞句

<1>たかい山がならんでたっていました。

（８）常識的知識／推論

<1>木の中ほどに、小えだであんだすがたがちょこんとあって、赤ちゃんはとが二わ、目をみはって身動きもせず、すわっていました。

<2>ふえふきとむすめは、かたをならべて、ふえをふきながら、一歩一歩、前へ進みました。

［２・２］複数個の異種の対象からなる複指示対象（異種複対象）を指示することへの手がかり

（９）”と”／複数連記による複指示対象の合成

<1>ふえふきとむすめは、かたをならべて、ふえをふきながら、一歩一歩、前へ進みました。

（１０）”いっしょに”による複指示対象の合成

<1>そうどというよく深な男が、さっきのうんずといっしょに、よひょうのうちに入ってきまし

た。

名詞句の指示対象の数の解析は，名詞句そのものに含まれる情報だけでなく，文脈情報や知識の利用とともに進められ，その利用のしくみについても考察を深める必要がある．また，Habel [5] が行なっているような数の情報を考慮した意味表現形式の検討も進めなければならない．

4　名詞句による複数個の指示対象への照応

複数個の指示対象に対する照応は，まず，3章での分類における複指示対象に対応して次の二つに分類される．

（1）同種の複指示対象への照応

<1>遠くのはまで、子どもたちが遊んでいるのが見えました。「おうい、おうい。」　みんな、何かと思ってとんできました。

（2）異種合成の複指示対象への照応

<1>そうどというよく深な男が、さっきのうんずといっしょに、よひょうのうちに入ってきました。二人はよひょうにすすめていいます。

上の二つの例では，両方とも，照応形そのものが複数性の手がかりを明示的に持っているが，明示的な複数性の手がかりを持たずに，複指示対象を照応する場合がある．そのような場合も含めて，照応形の表現形に依存した次のような分類が可能である．

（1）複数名詞・代名詞・数詞による照応

（1．1）同種の複指示対象への照応

<1>かさが五つできると、じいさまはそれをしょって、　．．．．．．．．．出かけました。

<2>はまのりょうしたちは、二人があまりいつまでもふいているので、心配になり、集まってきて、声をかけました。けれども二人は、ふり向きもせず、ふきつづけています。みんなは、近よってみて、「あっ！」とおどろきました。

上の例<1>では，代名詞「それ」が複指示対象を指示している．一般に，代名詞「それ」は単指示対象を指示するのが普通である．

（1．2）異種の複指示対象への照応

<1>右の写真は、シオカラトンボ、まん中はハグロトンボ、左はオニヤンマです。この三つは、体の長さもちがうし、形もみんなちがいます。

<2>じどうしゃとじてんしゃは、どんなところがにていますか。どちらものりものです。

（2）名詞句による照応

（2．1）接辞のついた名詞句による照応

<1>二ひきの子ぐまは生まれたばかり。．．．．．空があかるくまぶしくて、足のうらがくすぐったくて、子ぐまたちはくふくふわらいます。

（2．2）接辞のつかない名詞句による照応

ここに含まれる例の大部分は，照応形そのものに明示的な数の手がかりを含まない．推論操作を伴う照応である．

<1>ふと見ると，道ばたにじぞうさまが六人立っていました．．．．じいさまは，じぞうさまのおつむの雪をかきおとしました．

<2>ふたり（みさとこうじくん）は，しばらくこわいかおをして，にらみ合っていました．

<3>「雪がとけると、村じゅうの自てん車がうごきだす。まめつぶぐらいのかえるの子たちが、自てん車にひかれなければいい。」

<4>ついに，ワンリーもトンキーもしにました．どちらも，てつのおりにもたれ，はなを長くのばして，ばんざいのげいとうをしたまま，しんでしまいました．

複数の指示対象への照応において，日本語の場合に特に問題になるのは，複数の指示対象を持つという明示的な手がかりを持たないで複数の指示対象を照応する照応表現の存在である．

5　複数の指示対象への照応の解析へ向けて

複数の指示対象への照応の解析については，英語の文章におけるEschenbachら [6] の研究がある．照応表現としては，”they”という複数代名詞に限って議論を進めている．問題は複数代名詞の指示対象を同定することである．彼らの解析モデルにおいては，複数代名詞の指示対象である複指示対象は，その構成要素である単指示対象とともにFOCUSの中に置かれ探される．その探索の効率をあげるための原則が複指示対象への照応ということ

に強く依存して構成される．また，複指示対象をいつ，どのような手がかりに基づいて構成し，FOCUS の中に導入するかということについても考察を進め，一つの方略を提案している．複指示対象を構成する手がかりは，等位接続詞（and），代名詞（with），動詞の語彙的な意味などであり，それらを手がかりとして，単対象の間のＣＡＢ（Common Association Basis）関係に基づいて，複数の単指示対象から複指示対象を構成する．しかも，その構成は，できるだけ早く，手がかりが得られると同時に行なうという方略が提案されている．

ここでの最も基本的な問題は，複数個の単指示対象から一個の複指示対象を構成することを許す手がかりはどのようなものなのかということであろう．それは，いつ複指示対象を構成することになろうともやはり問題であり，複指示対象を格納する入れ物として，FOCUS を用いようが，単なる HISTORY LIST を用いようがやはり問題となるであろう．Eschenbachら［6］による，「等位接続詞（and），前置詞（with），動詞の語彙的な意味などを手がかりとする，複数の単対象の間のＣＡＢ関係に基づいて，複対象を構成する」という方略はその問題に対する不十分ではあるが一つの基礎的な解を提出しているということができる．

たとえば前置詞”with”を手がかりとする次のような規則が構成される．

［Ａ］”with”による単対象のグループ化は，ＣＡＢ関係が満たされる場合にのみ”x with y”は”x ⊕ y”を導くという条件に依存する．

この規則にとってもっとも適切な制約は，

［ＡＣ］x と y が most fine-grained level で同じ ontological type の instances である．

という条件である．ＣＡＢはつまり二つの単対象を結びつけるなんらかの共通の基盤である．

等位接続詞”and”は特に強い力をもってグループ化の操作を行なうと考えられる．”and”で結合されているということがそれらを結びつける強い共通の基盤となるのである．

［Ｂ］”x and y”ならば複指示対象を構成せよ．

問題になっている指示対象の性質，世界知識，談話のテーマなどにもグループ化は依存し，それらの要因もＣＡＢによって処理され得る．

また，Eschenbachら［6］は次の原則を導く．

「Connectednessの原則：

複指示対象のすべての部分指示対象はＣＡＢによって関係づけられていなければならない．」

いくつかの語彙的な概念もグループ化の力を持っていて，それもＣＡＢの特別な場合と考えられる．それは，たとえば，”meet”という動詞に備わっている力である．”meet”で関係づけらるということはそれらを結びつける強い共通の基盤であるということになる．

［Ｃ］”x meet y”ならば複指示対象を構成せよ．

日本語でも同様の議論が可能である．前節でも関連するいくつかの例が示された．

<1>山も、野原も、畑も、田んぼも、みんなまっ白な雪におおわれています。

<2>じどうしゃとじてんしゃは、どんなところがにていますか。どちらものりものです。

<3>そこで、じいさまとばあさまは土間におり、ざんざら、すげをそろえました。
ふたりしてせっせとすげがさをあみました。

<4>そうどというよく深な男が、さっきのうんずといっしょに、よひょうのうちに入ってきました。二人はよひょうにすすめていいます。

<1>，<2>，<3>は［Ｂ］に，<4>は［Ａ］に対応する．また，３章で検討した複数性を付与するいくつかの語句もこのような手がかり，特に［Ｃ］に対応する手がかりを与えるものである．

以下では，日本語の複数名詞による照応の指示対象の同定に関するいくつかの問題点について紙面の許す限り考察してみよう．次の例<5>では，物語の進行とともに，その登場物として，さる，しか，いのしし，うさぎ，かめ，いたち，たぬき，きつねが登場し，物語の本当に最後の部分で，それらすべてを照応する表現として”みんな”が用いられている．

<5>みんなは、びっくりして、くさむらにとびこみ、耳をかたくふさぎました。

したがって，「物語の登場物である」ということ

は登場物を結びつける共通の基盤と考えて次のような規則をたてることができよう．

［D］物語の進行にともなって登場してくる登場物をまとめて複指示対象を構成せよ．

上の例文が現われる物語は，最初の登場物として，まず，さるが現れる．そのさるが赤いろうそくをひろって山へもってかえり，さる以外の登場物であるみんなにそれをみせるところで次のような文章がある．

<6>すると、さるが、「あぶない、あぶない。そんなに近よってはいけない。ぼくはつするから。」といいました。

みんなは、おどろいてしりごみしました。

明らかに，この文脈では”みんな”の複指示対象は，さる以外の登場物の集合である．したがって，物語文章における，”みんな”という複指示対象への照応表現の解析においては，無条件に規則［D］によって構成される複指示対象をその指示対象とするわけにはいかない．文脈に依存して，その部分集合を指示することになるのである．

次の例<7>では，この文が現われるまでに登場するのは，”ろくべえ”という名前の犬と何人かの子どもたちである．そして，この”みんな”は，文脈を考慮しないとしたら，制約［AC］を働かせて，登場物の集合として”ろくべえ”を含まない子どもたちの集合を複指示対象として構成してあれば，それを指示対象とすることができる．子どもたちが”ろくべえ”に話しかけているという文脈や犬は話せないなどという常識的知識を用いればその指示対象の同定はもっと確実になる．

<7>みんな、口々に　いいました。

次の例では，同じく物語の進行とともに，”みさ”という名前の女の子と名前が未定の”男の子”，それにその”男の子”のものらしい”子犬”が登場し，”ふたり”という複数指示対象への照応が行なわれている．これは，登場物の中の人間である部分集合を照応している．制約［AC］を考慮しながら登場物のまとめを行なってゆかなければならないということである．

<8>そのとき、子犬がワンワンほえながら、ふたりの足もとをかけまわりはじめました。

さて，”みんな”にはさらに問題がある．会話文に現われる”みんな”の指示対象について，”自分（会話者）を含めたみんな”（<9>）なのか”自分（会話者）を除いたみんな”（<10>）なのかという違いである．

<9>「ねじをまいてもらった時しかうごけない。でも、いいさ。みんな、ぼくをかわいがってくれる。」

<10>「古い、おもちゃが、たくさんこのはこにすてられたんだ。ぼくらは、みんなごみばこ行きさ。」

次の例では，”二人”は物語の登場物である自分（話し手）と相手（聞き手）からなる複指示対象であり，”一人”の指示対象は単指示対象であるが，その複指示対象の中のいずれかである．

<11>「うん、それがいいや。これ、二人のひみつだよ。そうだ、ここに来るときは、二人で来ること、人に教えたり、一人でかってに来たりしないこと。」

引用文献

[1]玉村文郎：数詞・助数詞をめぐって，日本語学，第5巻，第8号，pp.4-14，1986.

[2]奥津敬一郎：数量表現，井上和子編，日本文法小事典，pp.200-204，1989.

[3]矢澤真人：数量詞の位置，寺村秀夫他（編），ケーススタディ日本文法，pp.102-107，桜楓社，1987.

[4]沖久雄：数詞・助数詞の文法，日本語学，第5巻，第8号，pp.15-25，1986.

[5]Habel, C.:Plurals, Cardinalities, and Structures of Determination, Proc. of COLING86, pp.62-65, 1986.

[6]Eschenbach, C., Habel, C., Herweg, M., and Rehkamper, K.:Remarks on Plural Anaphora, Proc. of Fourth conference of the European Chapter of the ACL, pp.161-167, 1989.